

序

ほとんどの養成校では、入学直後の学生に対して理学療法概論の講義を実施する。学生は理学療法士のイメージをある程度持っているかもしれないが、生理学、解剖学、運動学などの医学的知識をほとんどもっていない、いわば高校生に近い状態である。このような学生を対象に理学療法概論を講義していくとき、高度な医学的知識を必要とする講義内容に偏ることは望ましくない。そこで、本著では「理学療法事始め」として教育すべき内容、方法は何かということ十分に検討、整理した。事始めとして教育すべきことは次の6点である。

- ①本邦と諸外国の理学療法について（現状を知るためには歴史も重要である）。
- ②ICIDHとICFとは何かについて（広い視点から物事を理解するためには分類が重要である）。
- ③EBMやNBM, VBMを含めた評価の解説について（適切な評価は問題点を明らかにするために重要である）。
- ④理学療法士に求められる要素について（プロフェッションや倫理、志など古典は重要な示唆をくれる）。
- ⑤神道、仏教、儒教、武士道について（これらの宗教観は日本人のQOL、意思決定、精神性に大きな影響を与えている）。
- ⑥障害受容と幸福について（これらはリハビリテーション医療に多大な影響を及ぼす）。

また、受動的講義を避けるために多くの課題を示しているが、学生同士で議論させることで、授業への主体的参加、コミュニケーション能力向上が期待できると考えている。

さらに、本著では多くの症例による院内、家庭内のさまざまなシーンのハイビジョン動画を含んでいる。症例の実際の状態をみたことがない、1～2回生にもこれを使用することで効果的な教育が可能と考えている。動画撮影では、理学療法士の学生教育に使用すると伝え、全員に快諾していただくことができた。多くの方々が、「こんな状態になっても、まだ学生さんのお役に立てるのであれば本当に嬉しいです」と仰っていただけたことがとても印象に残っている。

参加していただきましたすべての症例の皆さまにこの場をお借りして心からお礼、感謝申し上げます。

本著によって、理学療法学や理学療法士に対する興味を向上させ、学生のモチベーションアップを引き起こすことができれば幸いである。

2017年9月

庄本 康治